

白藍塾オリジナル

2012入試小論文分析&解答のヒント

2012年3月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・樋口裕一・大原理志・大場秀浩

●慶応・商学部

今年度も、従来の商学部らしい問題。難易度も、ここ数年、それほど変化はない。

Iは、有名な経済学者のフリードマンが「企業の社会的責任」について論じた文章を読んで答える問題。一般に「企業の社会的責任」と呼ばれるものを否定している文章なので、そのつもりで読まない、とまどうかもしれない。

問1は穴埋め問題だが、「企業の経営者とは企業の所有者の代理人にすぎず、経営者が私人として自発的に社会的責任を引き受けることはあっても、それを企業の社会的責任とは呼べない」という筆者の主張が理解できていれば、正解を出すのは難しくないだろう。

問2は、社会のためにはなっても雇い主の利益にはならない例を1、それ以外を0とすればよい。(16)はやや判断に迷うところだが、経営者が自分のポケットマネーを使う分には、経営者は単に私人として行動しているだけなので、0だろう。

問3は、「企業経営者の所有者に対する責任」でよい。

問4は、課題文の第六段落の内容を要約すればよい。つまり、「企業の経営者が自分の金や時間や労力を使って社会への責任を果たすとしても、それはあくまで私人としてであって、企業の経営者としてではない」ということだ。

問5は、ここまで見てきたことからわかるように、社会的利益にかなうと同時に企業の所有者の利益にもなる場合。たとえば、環境対策をすることが、その企業のイメージアップに繋がり、長期的には企業の利益となるような場合のことを考えればよいだろう。

IIは、「渋滞学」について説明した文章。そもそも「渋滞学」というものを初めて目にする人のほうが多いはずだが、課題文をていねいに読めば、それほど難しいところはない。

問1は、「自己駆動粒子」と言われてもよくわからないと思うが、要は車と同じように

渋滞を起こすものを選べばよい。「イワシ」と「人」はわかりやすいが、「インターネットのポケット」はピンと来ないかもしれない。だが、あるホームページへのアクセスが集中すると重くなるなどの現象も「渋滞」の一種だと考えれば、腑に落ちるはずだ。

問2は時速の計算だが、公式を覚えていなくても、課題文のあとのほうに「流量は平均速度がわかればそれに密度をかけて計算できる」とあるので、そのとおりに計算すればよい。「175台/5分」は、もちろん、60分（1時間）の台数に直して計算すること。

問3は、 $1\text{ km}=1000\text{ m}$ を台数で割ればよいわけだが、50台というのは二車線の合計の値であるのを忘れてはいけない。つまり、1000を25で割った数字が答えとなる。

課題文の後半では、渋滞の現象を、0と1のデジタルな数字の並びを使ってモデル化しているが、問4はその部分の穴埋め問題。「臨界密度」というのは、課題文の前半にあるように、それを越えれば渋滞が起き始めるポイントのこと。密度が「0.5」以下であればすべての1が自由に動ける（つまり、渋滞が起きない）わけだから、逆に言えば、この「0.5」という数値が臨界密度になる。すべての1が自由に動ける間は、平均速度（定常速度）は当然「1」。したがって、先ほどの公式を使えば、「流量=密度」となる。しかし、この単純モデルでは、前半で指摘されている「準安定状態」、つまり臨界密度を超えても渋滞が起らない状態は表現できない。ややわかりにくい部分を説明すると、以上ようになる。

問5は、平均速度を計算する問題。図2では、1の総数は9で、動ける（つまり、前が0の）1の数は5。平均速度とは「ある時刻で動いた1の数を1の総数で割った量」なのだから、5を9で割れば答えが出る。

問6は、「自己駆動粒子が臨界密度を超えた状態」ということだろう。

問7は、「自由に流れているときは、流量は密度に比例する」ということ。

問8は、「本文での渋滞の定義を踏まえ」とあるので、「臨界密度」という用語を使えばよい。「サグ部では運転手が気づかぬうちに減速し、一台が減速すると衝突を避けるために後続の車も減速をするので、車間距離が縮まって、臨界密度を越えてしまう」などでいだろう。

問9は、ここまで答えてきたことを踏まえて考えれば、何の問題もないはずだ。図1と同じように、縦軸を流量、横軸を密度として、0から右上がりの直線を引き、流量=密度が0.5となる点から右下がりになって密度1で流量0となるような山型の図を描けばよい。

総じて言えば、ここ数年の傾向と同じように、論理的に考え、単純な計算ミスなどをしなければ、十分に対応できる。あせらず、一つ一ついねいに答えていくことが大切だ。

◎執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179)

<http://www.hakuranjuku.co.jp>